

敬和学園大学の歴史（その4）

北 垣 宗 治

はじめに

以下は敬和学園大学が開学した1991年4月から1995年3月に至るまでの4年間、つまり大学としての完成年度が終わるまでの期間についての重点的な記述である。私は初代学長として3期12年間務めさせていただいたが、私の「敬和学園大学の歴史」は学長としての第一期（つまり、この「その4」）で終止符を打ち、第二期、第三期については、その記述を後世の史家に譲りたい。さいわい、この第一期については『敬和学園大学の現状と課題：自己点検・自己評価報告書（1994年度）』が出ているので、読者はその文書をも参照されることを希望する。これから先は、私自身の立場と感想を多少大胆に加味した記述となることをはじめにお断りしておく。主語として「私」を用いるゆえんである。

（北垣）

11. 開 学

敬和学園大学は 1991年4月3日、最初の入学式を新発田館31番教室で举行了。この教室は240人を収容することができる、学内で最大の教室である。しかも入学してきたのは定員の200人を遥かに超す316人であったから、通路にたくさんの補助椅子を置いても、全員を着席させることは容易でなかった。しかし何事も最初が肝要であり、キリスト教の儀式にのっとり、賛美歌斉唱、聖書の朗読と祈祷をもって式を始めた。菊地次郎教務課長が新入生一人ひとりの名前を読上げ、呼ばれた新入生は起立した。316人の新入生に対して、北垣学長は入学許可を高らかに宣言した。そして学長は式辞の中で、「この大学はさっそく明日、新入生諸君の英語テストを実施します」と伝え、「四年後に諸君は、『敬和学園大学が私をつくった。私が敬和学園大学をつくった』という言葉をもって卒業していただくことを願いたします」という言葉で式辞を結んだ。学生代表として答辞を述べたのは敬和学園高等学校出身の近伸^{ちかのぶゆき}之で、彼の言葉もまたこのようにラディカルであった。「キリスト教の敬和学園大学は、神の御心に忠実な大学でなくてはなりません。もしこの大学が神の御心に忠実でないとしたら、私たちはその時、この大学を壊し

てくださいと、神に祈らねばなりません。」

会場が狭隘だったため、付き添ってきた新入生の父母は、一人も会場に入ることができなかった。彼らは二階の教室に設置されたテレビの画面で入学式のもようを眺めていた。この父母たちは、新入生の父親である渡辺優氏を会長とする敬和学園大学後援会を結成した。この後援会は、新しい私立大学を運営していくためにはなくてならぬ機関であり、敬和学園高等学校や地元の人々からの助言を得て、仙沢計美事務局長が設立のためのお膳立てをしたのであった。

教員たちの間では、第一回入学式の評判ははなはだ悪かった。ことにキリスト教主義大学での入学式に慣れ親しんでいた二三の教員からは、もっとましな会場で、厳粛かつ印象深いものとして挙行すべきである、そのために教員はアカデミック・ガウンを着ることが望ましい、といった批判と意見が出た。この反省に基づき、1992年4月の第二回入学式は新発田市民文化会館を借りることにし、合わせて教員たちのガウンを新調し、キャップは当初国際基督教大学から借用した。1992年以降はこの方式が敬和学園大学の入学式、そして四年後からは卒業式のパターンとして定着するようになった。また年次をへるにしたがい、入学式は新発田市民文化会館、卒業式は聖籠町町民会館で挙行すること、それには来賓として新発田市長・聖籠町長・市議会と町議会の議長、新発田市内に1992年に開校した職業能力開発短期大学の校長や、中条町に1980年代に誕生した南イリノイ大学新潟校の校長を招くというパターンが定着した。これら来賓と、学校法人敬和学園の役員は演壇に向かって右側の席に、学長をはじめとする全教員が左側の席に、厳粛な音楽（テープ）の調べに合わせて粛々と入場してから式が始まる。これは国際基督教大学で経験を積んだ西村秀雄講師が案出し、演出を担当するようになった方式であり、この方式は忠実に受けつがれて今日に及んでいる。

大学が第一回入学式の翌日に英語テストを実施したのは、どの程度の学力を持った学生が入ってきたのかを知るためであった。優秀という折り紙をつけてよい学生が約5パーセントいたが、箸にも棒にもかからない学生も約10パーセントいた。国際文化学科の方に優秀な学生が多くいたが、両学科の平均点を出してみると、英語英米文学科の方が上であった。最初の一年間、英語1A (Reading) を松崎洋子教授、英語1B (Speaking & Listening) をアラン・ブロンデ助教授が担当した。ブロンデは大きな声で授業する人だったから、

彼の声は廊下にまで響き渡った。新入生を200人と見てクラスの構成を計画していたが、予想を大きく外れて316人もの新入生を迎えたので、英語クラスを急遽増設することになり、松崎、ブロンデの負担は増加した。

新入生のためのオリエンテーションは、4月8日、9日の両日にわたり、一泊二日のリトリート形式でもって、黒川村（現、胎内市）の胎内パーク・ホテルで実施した。大学からホテルへはバス七台を連ねて移動し、教員たちも15人全員と留守番以外の職員がこれに加わった。天気は雨模様で、会場である体育館の内部は寒く、石油ストーブを何台か置いて暖をとらなくてはならないほどだった。オリエンテーションでは、延原時行宗教主任と、無教会系のクリスチャンである安藤弘教授の奨励を含めて、キリスト教のメッセージが要所要所で伝わるように工夫した。全学生は10のアドバイザー・グループに分けられ、アドバイザーとなった教員を中心としてグループごとの集会を持ち、学生と教員の自己紹介を通して、まずグループ内部で各自が知り合えるようにした。またアドバイザー・グループ対抗によるバレーボール試合を行うことによって、グループ内の結束をはかることにも努めた。こうした競技や、軽い体操の指導には体育担当の久島公夫教授があたった。

私は学長としてあらためて歓迎の言葉を述べ、学生諸君を大人として扱うつもりであると宣言した。その上で、どのような学生生活を送るべきかについての助言として、①大学は学問をするところである。自己の興味をどこまでも追求すること。②大学の教育は基本的に「自己教育」である。それは真の自己になるための自主教育であること。③四年間の在学期間に異性や教員を含めて10人の友人を作ること、の三点を強調した。そして敬和学園大学のめざしていることは、学生たちに、1) 歴史的な物の見方、2) International な物の見方、3) 道徳的な判断力、4) 芸術的なセンス、5) 数理的な物の見方、6) 究極的なもの、見えない世界への畏敬の念、上記の六点を体得していけるよう、力を注ぐつもりであることを説明した。私の発言を支えていたのが、1970年代に発表されたハーヴァード大学の新カリキュラムだったことは明らかである。松崎洋子教授は学生主任の立場から学生生活について、具体的な助言をおこなった。

胎内パーク・ホテルは当時の黒川村が伊藤孝二郎村長の強力な指導のもとに積極的に村の事業として開発したもので、胎内川を見下ろす景色のよい場所にあり、新入生のオリエンテーション会場としては理想的な場所であった。

ホテル内には温泉も備わっていた。公園内には昆虫の博物館があり、すぐ近いところに胎内スキー場がある。夜になると、胎内川のまんなかには作られた五色の噴水が泊り客の郷愁をそそった。羽目をはずして夜遅くまで騒ぐ学生もいて、二日目の講話のとき舟を漕いだりしたが、プログラムを終えて、再びバスで大学まで帰るときには、教職員は一種の達成感を感じていた。新入生のための胎内パーク・ホテルでのオリエンテーションはこの1991年以来毎年実施してきた。敬和学園大学は何をめざしているのか。敬和学園大学に入ってきた学生たちはこの四年間をどのように生きていくのか。このような問題意識を新入生に持たせることが主眼であるが、年によって強調点の置き方は多少異なり、福祉マインドを刺激する工夫をしたり、学内の文化・スポーツ・クラブの紹介に重点を置いたりしながら、今日に至っている。

敬和学園大学は当然のこととして、新入生を迎えるに先立って、大学自体を天下にお披露目するはずであった。新潟県、新発田市、聖籠町それぞれの長の日程の調整に手間がかかり、開学式は1991年4月16日（火）に、授業を休んで行うことになった。その日の空は開学を祝福するかのように見事に晴れ上がった。式に先立ち、聖籠館前で記念植樹が行われた。「ニュートンのりんごの木」である。仙沢計美事務局長の司会のもと、後宮俊夫理事長が挨拶し、北垣学長がこの木の由来と意義を説明したあと、六人がシャベルを用いて二本のりんごの木を植えた。後宮俊夫理事長、辻宣道・日本基督教団総会議長、北垣学長、渡辺正雄・東京大学名誉教授、大野時彦・新発田市総務部長、榎本栄次・敬和学園高等学校長。イングランド、リンカンシアにあるニュートンの生家、その裏庭にあたりりんごの木の子孫は、日本では秋田県の農業試験所に来ており、渡辺教授の忠実な弟子である西村秀雄講師の斡旋により恵贈を受けたもので、ニュートンのりんごの木としては、その当時、日本国内では秋田県のその試験所と、国際基督教大学と敬和学園大学の三箇所しかない、といわれていた。植樹用に秋田県から届いたその木は1メートルほどのものであったが、植樹のさいには、地元のりんごの木をその側に植えることが必要であると教えられ、その通りにしたのである。ニュートンのりんごの木はその後順調に成長し、やがて実をつけるようになった。しかしその実は食用に適したものとはとうていいえない。ニュートンが万有引力の法則を思いついたのは、木から落ちるりんごを見たときであって、それを食べたときではなかったことを思い出す必要があるであろう。その木はここに学ぶ若者たちに、「考えよ、探求せよ、発見せよ」という、雄弁なメッセージを伝えるためのシンボルなのである。

開学式は栄光館前の広場にステージを設け、椅子を並べ、紅白の幕をはりめぐらせた青空会場で挙行された。普通のキリスト教学校であればオルガンがあり、音楽担当の先生が奏楽者をつとめるところである。敬和学園大学の場合はそれがかなわず、オルガンは松井愛美理事が十日町から車で運び込み、奏楽は新入生のクリスチャン学生である鈴木喜恵が担当して、式は一同でベートーベンの第九交響楽から取られた賛美歌「あめには御使」を高らかに歌うことから始まった。聖書を小淵康而理事が朗読し、祈祷を高橋稔理事がささげ、式辞を後宮理事長が述べた。続いて北垣学長は次のように挨拶した。

ひとつの小さな大学が誕生するということは、取り立てて騒ぐほどのことではないかもしれませんが。しかし、一度は流産するかと危ぶまれた胎児が、こうして無事に誕生したのでありますから、関係者の喜びはまことに筆舌に尽くしがたいものがあります。・・・思えばこの大学の設立は新潟県下のキリストの諸教会の願いであり、祈りでありましたが、神はその祈りを聞き入れて下さいました。・・・私たちはキリスト教の伝道をするためにこの大学を設立したわけではありません。しかし、国際化とボーダーレスの時代にあって、キリスト教主義はいまなお、二十一世紀を担っていく若者ひとりびとりの人格を磨くのであり、神と人ともに奉仕する精神を涵養いたします。それは見えるものよりは見えないものに一層多くの関心を払う教育なのであり、烈しい競争社会の中にあって、弱者の痛みを認識して、手をさしのべることのできる人物を養成するもとでであると確信致します。

続いて六人の来賓が祝辞を述べた。すなわち辻宣道・日本基督教団総会議長、金子清・新潟県知事、近寅彦・新発田市市長、長谷川榮作・聖籠町長、婁警予・長春師範学院長、松山義則・キリスト教学校教育同盟代表（同志社総長）である。まず敬和学園と日本基督教団との関係であるが、1968年における敬和学園高等学校の設置は教団の常置委員会で議せられたことであり、教団の祝福を得て出発したという歴史的事実がある。辻宣道議長が敬和学園大学の開学式で、最初の祝辞を述べたことは、敬和学園のルーツを鮮明にする点において有意義であった。しかし考えてみると、後宮俊夫理事長も、またのちに敬和学園の監事を勤めた飯清・霊南坂教会牧師も、教団の総会議長を務めたベテランなのである。金子知事は、敬和学園大学を訪問した唯一の新潟県知事であった。

前述したように、敬和学園大学と長春師範学院は姉妹校提携をすることになっていた。この機会に婁院長を含む四人の訪問団が来学したのである。訪問団の中には一人だけ日本語のできる人がいた。谷精厚教授で、通訳を務めた。谷氏は仙台の東北帝国大学に学んだ人で、戦前風の重厚な日本語を使いこなした。一人は中国の古典文学者である趙福梅教授（趙教授の来学は翌年の「文選」国際学会と関係していた）、一人は中国有色金属工業総公司の代表である宮国良氏で、その会社は長春師範学院のスポンサーだということであった。同志社の松山総長は北垣学長の親しい先輩・同僚（学生運動がはなやかだった1973-76年に、同志社大学の松山学長の下で北垣は学生部長を務めた）であり、敬和学園が加盟しているキリスト教学校教育同盟の理事長として祝福の言葉を述べた。

開学式の機会に、校地を提供した旧地権者18人、ヴォーリズ建築事務所、新発田建設、伊藤組、石井組、岩村組、新菖工業、ユアテックに感謝状が贈呈された。大学設立資金のための募金委員長を務めた松井愛美理事が経過報告し、新発田市合唱連盟有志がハレルヤ・コーラスによって花を沿え、春名康範理事の祝祷をもって開学式は無事終了した。開学式の出席者は教職員を合わせて243人であった。

開学式のあと、同じ場所と栄光館のピロティを会場として開学祝賀会が開かれた。北垣学長の歓迎の言葉に続き、祝いの舞「此の君」を京都の藤間勘素奈（奥田かな）が、学長となった父の大学の前途を祝して舞った。食前の感謝を敬和学園高等学校の榎本校長が捧げ、乾杯の音頭を、つい最近まで衆議院議員であり、元文部大臣、元法務大臣だった稲葉修氏が取った。稲葉氏は着物姿で車椅子に乗り、この喜びの日にキャンパスに姿を現した。稲葉氏にとってこの「阿賀北の大学」設立は一つの執念だったのであり、文部省の関係者への強力な働きかけ等を思い出して、喜びはひとしおであったにちがいない（稲葉氏は翌1992年8月に永眠した）。同じことは近市長についてもいうことができた。近は新発田市に大学を誘致することを公約にかかげて市長選挙に立候補して当選したのであったから、もし大学ができなければ市長を続けることができないこともありえたからである。

同日の夕方、開学記念学術講演会が、新入生と市民を対象として、新発田市民文化会館で開催された。講師は東京大学、新潟大学、国際基督教大学で自然科学史を教えてきた渡辺正雄教授で、「ニュートンのりんご」と題して

行った。爾来毎年四月に、新生を歓迎し、市民をも招待して行う学術文化講演会は、敬和学園大学の年中行事として定着してきたが、渡辺教授はそのトップ・バッターにふさわしい人であり、内容もきわめてすぐれたものであった。この「新生歓迎特別学術文化講演会」には2年目(1992年)には同志社大学の考古学者、森浩一教授の「考古学者の見る環日本海文化」、3年目(1993年)には東京大学法学部の藤倉皓一郎教授の「地球に何を返せるか?」、4年目(1994年)には東京大学教養学部の本間長世教授の「二十一世紀のための学問」と続いた。

こうして敬和学園大学は出発した。それはまだ田圃の真中にぽつんと立っている大学にすぎず、新新バイパスはまだ開通しておらず、旧国道七号線沿いのショッピング・タウンもなかった。新潟交通バスの停留所は「敬和学園大学前」と名を改め、そこでバスを降りると視界を遮られることなしに大学を前方に眺めることができた。新潟から通学する学生たちの多くは、大学がバスを取得するまで佐々木駅から大学まで歩いた。しかし自分の車で通うことのできる恵まれた学生たちには、キャンパスの中にいくらかでも駐車する場所を見出すことができた。キャンパスにはさかんに木が植えられ、松の木や桜の木が増えていったが、桜の花見ができるようになるには、あと何年も待たねばならなかった。

12. キリスト教教育

敬和学園大学はキリスト教教育をどのように実施していくべきか? これは学長に課せられた大きな問題だった。私はこれまでにいろんな大学のキリスト教を見てきた。母校の同志社大学、英国のセント・アンドルーズ大学、米国のアーモスト大学、ハーヴァード大学。キリスト教教育の目的を「学生を一人でも多く、クリスチャンに育て上げること」と定める学校もあるであろう。外国のミッションが経営、指導する学校であれば、そういう目的も首肯できる。しかしその場合には理事はもちろんのこと、教員、職員の全員がクリスチャンである、といった態勢を敷かなくてはならない。国際基督教大学や四国学院大学では教員はすべてクリスチャンでなくてはならないということであったが、敬和学園大学では私が学長予定者を引き受ける前の段階で、クリスチャン、非クリスチャン混合の教職員態勢の路線が引かれていた。つまり、なるべくクリスチャンの先生や職員を集めるけれども、科目や職種によってはクリスチャンを確保出来ない場合、それはやむをえないとする、という考え方である。日本の総人口に対してクリスチャンの占める比率は、カ

トリックとプロテスタントを合わせても1パーセントという現状で、あまりにキリスト教色に凝り固まった教育体制を敷くことは、新潟県の歴史と地域性を考えると、学生募集に差支えを生じるかもしれない。敬和学園大学はキリスト教を指導原理とし、教育原理とするけれども、そのキリスト教主義教育はクリスチャンと非クリスチャンの協力によって達成するものでなくてはならない。先ずカリキュラムの面では、「キリスト教学」4単位を一年次生の必修科目とした。だが必修科目の「キリスト教学」だけではとてもキリスト教教育として十分というわけにいかない。なぜなら、キリスト教は生き方（と死に方）、人生哲学、道徳的判断のすべてに関わるものだからである。1991年度の「キリスト教学」は延原教授と山田耕太助教授が担当した。延原は「他宗教、異文化との対話を軸に」東西比較論を展開しつつ、信仰論、キリスト論、宣教論、プロテスタント原理の再吟味を論じた。延原の組織神学的アプローチに対し、山田は新進の新約学者らしく、前期に「新約聖書と文学批評」、後期には「新約聖書と社会科学」を論じた。

この時期のカリキュラムを眺めると、キリスト教に関わる科目が案外備わっていることに気付く。その第一は旧約学者である永野茂洋助教授と、ルターの宗教改革に詳しい岩倉依子助教授が、それぞれ個別に担当する「キリスト教史」であるが、それ以外にも安藤弘教授、延原教授がそれぞれ個別に担当する「比較宗教思想」がある。延原教授の「哲学」や、私の担当した「比較文学」でも、キリスト教思想は重要な部分を占めていた。また横坂康彦講師の「音楽・音楽史」はキリスト教音楽に重点をおくものであった。

大学のキリスト教教育の中心となるのは宗教主任（チャプレン）である。さいわい敬和学園大学は初代宗教主任（のち、宗教部長）に、うってつけの人を与えられた。延原時行教授である。延原は兵庫県伊丹市の出身で、神戸高校から同志社大学神学部に進んだ。ルター、バルトの神学から出発し、自ら日雇い労働者を体験して在家宗教の重要さをさと、哲学者滝沢克己に師事して哲学的な真理探究の仕方を学び、のちにクレアumont神学校に留学して John B. Cobb 教授に師事して今日に及んでいる。西田哲学を学び、鈴木大拙やホワイトヘッドの著書に親炙することから、キリスト教と仏教との対話の視点を獲得し、それが常に彼の神学的思惟の視座となっている。

延原宗教主任と私は同志社大学にモデルを取り、毎週水曜日の二時限（10:40-12:10）にチャペル・アセンブリー・アワーを実施することに決めた。

それは大学主催の重要な行事であり、この90分間には他の授業科目は時間割に一切組まない。私は学内にいる限り、必ずこれに出席することにした。そのうちに延原教授の提案により、前期・後期の始まりと終わりには学長が奨励・講話を担当する慣習ができてきた。この時間をチャペル（30分）とアセンブリー（60分）に分けて実施することが普通であるが、内容がキリスト教講話である場合には、チャペルとアセンブリーに分けることをしなかった。チャペルの説教・奨励は宗教主任（またはクリスチャンの教員、職員、学生）、アセンブリーの講話の講師には学内の教員、外部から招く講師、そして時には学生が担当した。

学校法人敬和学園の理事は、チャペル・アセンブリー・アワーで最も有難い講師であった。理事の多くが牧師だったからである。4月10日、第一回のチャペル・アワーでは、理事として、大学創設に最もエネルギーを注いだ春名康範牧師（日本基督教団新潟教会）が「人生、一歩先は光」と題して講演した。春名は関西アクセントで、ユーモアを交えながら、縦横無尽に体当たり式の説教をする人で、説教者としてすでに名声を確立していたのみならず、漫画家としても『信徒の友』に作品を連載する腕前の持主だった。（しかも、伊丹教会での少年時代、教会学校では延原時行神学生に教わったという背景をもつ。）

春名理事に続き、大沢正司理事（新発田教会牧師）、松井愛美理事（十日町教会牧師）、高橋稔理事（中条教会牧師）、小淵康而理事（新潟信濃町伝道所牧師）、原田史郎理事（東中通教会牧師）の諸理事をはじめ、学園の評議員である西八条敬洪牧師（長岡教会）、酒井春雄牧師（栃尾教会牧師）がチャペル講話を担当している。中でも松井理事は教会音楽に詳しく、賛美歌指導に長じていたので、初年度の5月には「賛美の心」、11月には「クリスマスの歌を歌いましょう」と題して、講話と賛美歌指導をした。職員の中では教務課長補佐の田辺昌邦が前期には「神の愛と人の愛」、後期には「人生のパノラマ」と題して奨励している。学生の中からは近伸之が「神様からのラブレター」と題して、堂々たる奨励を行った。（近は敬和学園大学を優秀な成績で卒業したのち、新潟市役所に入り、福祉関係の仕事をしていたが、意を決して東京基督教大学に入り、首席で卒業し、豊栄キリスト教会の牧師となり、今や敬和学園大学のチャペル・アワーで時折説教して、後輩に霊的な賜物を与えている。）

開学して二年目に当たる1992年には、実験的に90分のチャペル・アセンブリ・アワーを45分ずつ、週二回、火曜日、金曜日に行うことにした。アセンブリに外部から講師を招くような場合、礼拝は短くせざるを得ず、そのため延原教授は「三分間説教」という方法を編み出した。俳句を作ることのできる延原は、あたかも俳句のように三分間で簡潔に、見事にメッセージを伝えることができた。(延原の三分間説教は『三分間のおとずれ—敬和学園大学のキリスト教主義とは何か』(1994)と『地球時代の訪れ』(1995)の二著に収められている。)しかし週二回のチャペル・アセンブリ・アワーという方式では回転が速くて、ともすると計画が追いつかなくなるきらいがあった。宗教センターがあって、宗教主任の下に事務職員がいる、という体制をとることができない以上は、週二回制は無理であると判断して、三年目(1993年)からは元の週一回、90分制にもどし、金曜日にそれを実施することにして今日に至っている。

最初のうちチャペル・アセンブリについて、学長、宗教主任、学生主任、事務局長の四人から成る委員会が立案してきたが、これは1992年以降、宗教主任を委員長とする「キリスト教と教育委員会」に仕事を委任するようになった。この委員会では特に山田耕太助教授と永野茂洋助教授の協力と働きがめざましかった。大学は学生の出席を取り、年間20回以上出席を求め、その回数に達しないときは二年次にやりなおさせることにしていた。しかし、20回に満たない学生の名前を掲示して、出席をうながしてきたが、卒業判定にさいして、教授会がそれを勘案しないことがわかると、出席者はどんどん減っていき、20人くらいという状況になった。沢山の学生が出席して、がやがやとやかましい状況を長らく経験してきたので、20人の静かな集会も悪くない気がしたが、それでは別の意味でキリスト教教育をおろそかにしていることになる。後年、チャペル・アセンブリ・アワーを単位化することによって、出席者数の問題は解決されるようになったが、試行錯誤の期間は長らく続いた。(1996年のことだが、京都の花園大学からキリスト教に理解の深い仏教哲学者である西村恵信教授を招いて「生命を見つめて生きる」という講話を聴いたことがある。西村教授は私語する学生に向かって一喝された。一喝する講師は極めて珍しいといわなくてはならない。学長も宗教主任も、学生の私語には悩まされ続けてきた。)

初年度に講師として説教・講話を担当した人には、その後も引続き年一回は担当を要請し、協力を得てきた。1992-95年の三年間に限定してチャペ

ル・アワーの「新人」講師を紹介すれば、鈴木敏（小出教会）、平松潔（五泉教会）、佐々木栄悦（東新潟教会）、早瀬和人（新潟教会）、原田多恵子（東中通教会）、上田晋（新津教会）、栗原昭正（高崎教会）、伊藤義清（行人坂教会）、島田進（見附教会）の諸牧師となる。アセンブリ・アワーにはさらに次のような多彩な人々を迎えている。米国における姉妹大学 Northwestern College のJames Bultman学長とLyle VanderWerff教授、延原教授の母校クレアモント神学校のRobert Edgar校長、中条町の南イリノイ大学新潟校のJared Dorn校長、敬和学園高等学校前校長のJohn A. Moss博士、ヘブライ大学上級講師のJon Whitman博士、新潟のボランティア・センターの高橋芳子所長、牧人会の山下勝弘理事長、敬和学園高等学校の角田三郎寮長、小川文勝ボランティア主事、同志社大学の竹中正夫教授、新発田市の近寅彦市長、聖籠町の長谷川榮作町長、新発田建設の渡辺孝二郎社長、新潟経営大学の利根川裕教授。ソウル神学大学のCAPPELA合唱団は複数回にわたって来学し、力強い賛美の歌声を会堂いっぱいに響かせた。

敬和学園高等学校の教育プログラムの特色の一つは全生徒に「労作」をさせることである。教室の掃除、ガラス拭き、庭の草取り等々、とにかく体を動かして勤労を体験させる。肉体労働ができない生徒には図書室で図書カード作りを手伝わせる。それは神に対する奉仕の一形式である。この精神を大学で活かすにはどうしたらよいか。こうして私が到達したのは「ボランティア活動」であった。全学生が一年間に一週間ボランティア活動をする、というのが基本的なアイディアだった。しかし、すぐにわかったことは、300人の学生に一齐にそれをさせるには、それのお膳立てが必要であること、また福祉施設との連絡、連携が必要であること、学生を派遣する前にどうしても一定の心構えをさせなくてはならないということだった。福祉施設の見学から、施設にいる知的障害の子供たちや、老人ホームの老人たちに接触するところまで進ませるのはなかなかのことであった。1993年に小川文勝氏を「ボランティア主事」として迎え、聖籠館内の小部屋を「ボランティア指導室」（のち、「ボランティア相談室」）とすることによって、それまで担当してきた職員の重荷の一部が解消した。小川主事は精力的に働き、日本全国で唯一の「ボランティア主事」であることを誇りとしていた。

小川主事は新潟県内の小学校、中学校で長らく教えてきた人で、退職後には新発田市の社会福祉協議会の事業にたずさわってきた。小川主事を迎えることにより、敬和学園大学の福祉体験学習は制度化された。学生たちはそれ

ぞれの体験をレポートに書いて報告し、学長はそのレポートをすべて読むことを義務と心得た。それを読んでいくうちに、おのずと一種のパターンが感じられるようになった。それは「ボランティアに参加するのは乗り気がしなかった。こわごわ施設に行ってみると、知的障害をもつ子供らが大声を上げて歓迎してくれた。一緒に遊び、一緒に仕事をした。彼らの方が仕事は上手だった。予定の二日間が終わってさようならを言うと、『またきてね!』と言われた。彼らの目は輝いていた。私は彼らから元気をもらって帰ってきた。」といった内容である。これを読むとき私は、これこそが教育ではないか、と強く感じた。なぜなら学生たちはこの体験を通してまったく新しい世界を発見したのであり、「自分のようなものでも」期待してくれる人が存在することを知ったからである。ボランティアといいながら強制するのか、という批判が学生からはしばしば出たけれども、若い頃にはこの程度の「強制」が教育であるということを、私自身学んだような気がする。このような一面は、キリスト教教育に欠かすことができないと確信する。

13. リベラル・アーツ教育

敬和学園大学は学生にリベラル・アーツ教育を実施することによって、二十一世紀を積極的に生きていくことのできる人間をつくることを目標としてきた。しかしこの「リベラル・アーツ教育」は日本でなかなか正しく理解されない憾みがある。日本の大学では伝統的にいわゆる「悪しき専門主義」という考え方の傾向が強く、専門を持たない人間はえてして軽視されがちである。しかし、四年間の学部教育によって本当に専門の教育をしたといえるであろうか。カリキュラムに並んでいる「専門科目」は、はたして専門人を作っているであろうか。結局専門人の養成は大学院に任されるというのが実情であろうが、「法学研究科」でも法曹界からすればまだ十分専門向きでないことから、法学研究科とは別に「法科大学院」が作られてきたという事実が端的に示すように、厳密な意味での専門教育、専門人教育は至難のわざである。リベラル・アーツ教育は学生が将来どのような専門を選ぼうとも、広い視野をもって適応していけるような、人間創りのための基礎教育であると見做すことができる。

そのため敬和学園大学はモデルをアメリカのリベラル・アーツ・カレッジに取り、カリキュラムは人文・社会・自然の三分野に亘って設置した。大学出発当時のカリキュラムでは、人文系科目としてキリスト教学（必修）、哲学、文学、文化人類学、心理学の5科目、社会系科目として歴史学、社会学、

政治学、経済学、商学の5科目、自然系科目として自然科学概論、自然科学史、情報処理論Ⅰ、Ⅱ、統計学の5科目が置かれている。各分野から8単位以上、合計24単位以上を取るようになっていた。このカリキュラムを批判的に眺めるとき、自然科学分野が弱いことを認めざるを得ない。自然科学であれば、物理学、化学、生物学、天文学、地学、数学等を独立した科目として設置したいところである。しかしこのためには膨大な予算が必要であり、当時の敬和学園大学にはそれだけの財政的裏づけは望むべくもなかった。やむをえず、西村講師が「自然科学史」を通して、自然科学を生成の過程でとらえることを教えた。また金子哲夫教授の「統計学」は数学と密接に関係する科目であるということで、これもまた自然科学と見做すことにした。リベラル・アーツ教育には本来「音楽」と「美術」は欠かせないのだが、ピアノはなく、音楽教室もない敬和としては、敬和学園高等学校出身の優れた宗教音楽の専門家である横坂康彦講師（新潟大学助教授）による「音楽・音楽史」（国際文化学科の「専門教育科目」）で音楽教育の小部分を提供することにした。大学設置申請をした段階では、非常勤講師の担当する時間数に厳しい制限が加えられており、カリキュラム原案に入れていた「美術・美術史」は涙を吞んで割愛することになった。なお、二学科制ではあるが、学科間の垣根はできるだけ低いものにし、学生は自分の所属しない他学科の科目も自由に履修して卒業単位に加算できるようにした。

外国語科目としては、第一外国語として英語を二年間で8単位、第二外国語としてフランス語またはドイツ語を二年間で4単位必修することになっていた。英語では native speaker の授業が三年間必修であった。保健体育科目は二年間で4単位が必修。敬和学園大学としてのカリキュラム上の特色を明確に打ち出すために、完成年度が終るのを待って、すっかり一新した外国語教育プログラムを立てるために、松崎洋子教授を委員長とする外国語教育改革委員会を作った。それは外国語は一科目だけ必修とし、どの外国語に関しても「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能を開発するために工夫されたプログラムであり、敬和学園大学の外国語教育はこれによって、1995年以降は飛躍的に進展していった。

14. 国際主義教育

世を挙げて国際化の時代である。1990年代には「グローバル」という言葉が流行り、地球時代の意識が強くなっていった。世界はグローバルイズされ、国境の垣根は低くなり、インターネットの出現によって、情報は瞬時に

して世界を飛び回る時代に突入した。敬和学園大学は二十一世紀という「地球時代」に活躍する若者たちの教育をあずかることを意識して、「国際主義教育」には大学を挙げて取り組むことにした。大学出発当時の32人の専任教員の中に3人のアメリカ人教員（Alan Blondé助教授、James B. Brown助教授、Sanford Goldstein教授）が入っていることは当然のことだが、英語、ドイツ語、フランス語にも毎年 native speaker である非常勤講師を備えてきたこと、そして後年「契約講師」という制度を設けて、外国人教員の充実をはかっていることは、敬和学園大学の国際主義教育の基礎となることである。

すでに1990年11月に米国のノースウェスタン大学とはキリスト教主義高等教育を目的とするパートナー同士である、との盟約を結んでいた。次は中国の長春師範学院との盟約締結である。そのため、1991年4月26日、北垣学長と仙沢事務局長とは新潟から空路ハバロフスク経由で中国東北部に入った。長春に四日間滞在し、長春師範学院を公式訪問し、婁警予院長・北垣学長との間で友好大学の盟約を締結した。まず両大学間の協定事項についてざっくばらんに話し合った。両大学は相手側の利益、自主的権利を尊重することを前提として、教育と研究の両面で交流することを決めた。相互に学生を交換留学生として受け入れること。希望する教員がある場合には、短期間、相互に受け入れること。図書館で必要とする文献の斡旋等で便宜をはかること。その他学術交流の文脈で必要な事業をすること。具体的には、長春師範学院では外国語として日本語を教えており、日本語教師を必要としていた。敬和学園大学の教員をここに派遣するだけの余裕はないが、日本語教師を斡旋することはできるので、そのことは協定の内容に盛り込んだ。

敬和学園大学の開学当時の外国語科目は英語、フランス語、ドイツ語、国際文化学科の専門教育科目としてのロシア語の四言語で、中国語、韓国朝鮮語は将来設置するという含みであった。長春師範学院はさしづめ直面する国際的なプロジェクトを持っていた。それは六世紀に中国で編纂された重要な古典的詞華選である「文選」に関する国際学会を1992年8月に長春師範学院で開くことで、その共催者となることを求められた。敬和学園大学には中国文学者は一人もいないが、それはかまわない、お膳立てはすべて長春師範学院側でするから、という。恐らくは助成金を得るために、外国の大学との共催のかたちを取る必要があったのである。友好関係を示すため、翌年の夏休中のことでもあり、出席すること以外何もできないけれど、とにかく引き受けることにした。こうして1992年7月末、北垣学長夫妻、松崎洋子教授、

仙沢事務局長の四人がこの国際学会に顔を出した。

長春師範学院には谷教授以外にも、日本語のできるスタッフがいたし、学生の中にも日本語で積極的に話しかけてくる人がいた。副院長の陳洪恩氏は日本語も英語もまったくできない人だったが、始終にこにこ笑い、人民服姿が毛沢東そっくりであった。学院内の教室や図書館、コンピューター教室等を案内された。長春滞在の最後の日には婁警予院長の住む集合住宅に夕食に招かれた。院長の夫である田野氏は長春計算器技術職業学校の校長であるが、温和な人で、その夕食の御馳走はすべて田先生の準備したものだった。円形テーブルに並べられた皿の数もレストランに劣らなかった。婁院長は中国語教育の専門家で、若い頃には上海のミッション・スクールで教育を受けたという。

1992年夏の4人の訪問団は上海、北京経由で長春に入り、「文選」をめぐる国際学会に「顔を出した」。日本の他の大学から参加した専門家もいた。研究発表や講演はほとんど中国語でなされたので、四人は発会式と閉会式に出る程度で、あとは長春の観光についやした。その後長春師範学院出身の学生が一人敬和学園大学に学んだが、二年目には他大学に移った。彼は個人的な留学で、学院からの推薦で来たわけではなかった。また後年敬和学園大学で中国語を設置したが、担当者が急にやめて後任に困ったことがあった。婁警予院長は学院を退いたばかりで、敬和に赴任することを熱望していたが、アメリカ在住の母上が病気になったため、それは実現しなかった。婁女史はその後、別の大学の学長に就任した。

他方、アメリカのノースウェスタン大学との関係はもっと実質的な形で進展した。1991年夏、同大学の Summer Institute に、敬和学園大学の学生7人が参加した。学生の短期海外留学として初めてのことであり、北垣学長夫妻は客員としてそれに参加した（ただし北垣夫人は最初の10日間だけ）。7月16日の夕方、一同は成田空港を出発、シアトル、ミネアポリスを経由してアイオワ州のスー・シティに着いた。夜の11時にもかかわらず、ヴァンダウェルフ教授が自らミニバスを運転して出迎えてくれた。Summer Institute は7月18日から8月20日までのプログラムで、日本からは敬和以外に恵泉女学園、沖縄女子短大、そして香港と台湾から三人、合計36人が参加していた。男子7人、女子29人という内訳だった。男子はEight-Plex、女子はHospers という寄宿舍が宿舎として割り当てられた。

プログラムはすべてヴァンダウエルフ教授のアイディアに基づくもので、日本や韓国のキリスト教主義大学に呼びかけて希望者を募り、英語の訓練をすると同時にキリスト教にふれさせ、さらにアメリカ中西部の田園地帯の文化を紹介するよう工夫されていた。英語の授業には Takalo 教授という、エネルギーな先生を配し、ヴァンダウエルフ教授は礼拝と、ヨハネ福音書の講義を担当し、四人のすぐれた学生が助手として寄宿舍に住み、留学生たちを助けた。朝は短い礼拝をもって始め、ヴァンダウエルフ教授はもちろんのこと、タカロ教授、ブルトマン学長、四人の助手たち、それに私までが礼拝の奨励を担当した。日曜日には町の教会への出席が奨励された。週末には Excursion があり、アイオワ州、ネブラスカ州の田園地帯をまわったり、Powwow と呼ばれるインディアンの大集会を見学したりした。土曜・日曜にはホームステイ先が割り当てられて、参加者たちはアメリカの家庭の温かさを経験することができた。プログラムが終ると、敬和からの短期留学生は一緒に帰国したが、中には8月の終からノースウェスタン大学に正規学生として学ぶ者、さらには他のアメリカの大学に日本語講師として赴任する人もいた。ノースウェスタン大学のサマー・インスティテュートには、敬和学園大学から1992年夏には3人、1993年夏には6人、1994年夏には3人が参加した。しかしながら、ヴァンダウエルフ教授が引退してからは、かつてのような活気を失ったような印象を受ける。

1991年夏にはアメリカのもう一つのキャンパスが敬和学園大学の学生のためにサマー・スクールを用意してくれた。それは延原教授がそこで日本語を担当してきた California State University, San Bernardino で、そのプログラムは American Culture and Language Program (ACLP) と呼ばれ、Office of Extended Education and Off-Campus Program が担当していた。敬和学園大学からは14人の学生がこれに参加することになり、延原教授自身がともに渡米して、アドバイザーを務めた。また敬和学園高校の出身者で、テネシー州の大学に留学していた高橋正氏が助手として参加した。7月30日から一箇月間のプログラムで、午前中英作文2時間、米国文化1時間、午後は会話1時間、リスニング1時間という時間割で、2クラスに分かれていた。二人の若い講師が二つのクラスを交互に担当し、火曜から金曜までのスケジュールをこなし、土曜・日曜はホスト・ファミリーと自由にすごすことになっていた。ホスト・ファミリーの中には学生をメキシコまで案内してくれた一家もあった。月曜日はフィールド・トリップで、ディズニーランド、シーワールド、ユニ

ヴァーサル・スタジオ、サウス・コースト・プラザといった、南カリフォルニアの主要な観光地へのバス旅行が行われた。

私は8月8日から11日までサン・バナディーノを訪問し、ACLPの授業を参観し、学生たちを激励した。ACLPは全員ホームステイ方式で、ホームステイ先に問題なく適応した学生もいたが、逆に不適応のためにノイローゼ気味になる学生もいた。そういう場合にはACLPのオフィスが適宜別のホームステイ先を紹介したが、全期間ホームステイさせる方式には問題が生じやすかった。サン・バナディーノは南国であり、生えている樹木も南国風である。会話のクラスはまったくリラックスした雰囲気の中で行われていた。Cultureのクラスでは諺のレッスンが行われ、若い講師が "Blood is thicker than water" ; "Early birds catch a worm" 等のコトワザを紹介しては、それらを出発点として、日本の類似のコトワザを言わせたり、意味を考えさせたりして、文化の相違を教えるように努めていた。私はプログラムの責任者であるDean Lee Porterにも会い、次年度以降のことを相談し、さらにPresident Anthony H. Evansをも表敬訪問した。ACLPには1992年夏には12人、1993年夏には23人、1994年夏には18人が参加、ノースウェスタンのサマー・インスティテュートを選ぶ学生数を常に上回っていた。

敬和学園大学が公的に応援ないし支援した第三の短期留学先は、英国のAnglo-Continental社が英仏海峡に望む保養地Bournemouthで開催する講習会で、私がそこを訪問したのは2002年夏であった。ここは米国の二大学よりもさらに国際色豊かで、ドイツやフランス、中東やロシアからも参加者があり、語学訓練の観点からすると教授法もより専門的であった。このプログラムには1992年夏に3人、1993年夏に12人、1994年夏には13人が参加した。上記三つのプログラムで合格した場合、教授会は敬和学園大学の卒業単位として認定した。

敬和学園大学は留学生の受け入れについて、開学時からオープンであった。最初の留学生は第一期生として国際文化学科に入学した韓国の姜大一君で、すでに徴兵義務を終了しており、人間的に成熟した青年だった。さっそくアセンブリー・アワーに登場してもらったところ、彼は「日本から韓国へ、韓国から日本へ」というテーマで日本語のスピーチを行った。その後中国、台湾からの留学生が少しずつ増えていった。もっとも印象的だった留学生は第三期生として英語英米文学科に入学した中国の宮巍君である。彼には1992

年夏北京で松崎教授と北垣学長が面接した上で入学を許可したのであった。その際彼は日本語があまりできなかったが、1993年に入学してからは刻苦勉励、ドアが開くと同時に図書館に入り、図書館を最大限に利用した。ブロンデ教授のゼミに属しながら、国際文化学科の大海教授の指導をも受け、有名な大海東京ゼミにも参加した。月岡温泉の或るホテルでアルバイトし（彼はカクテル専門で、百種類のカクテルを作ることができたが、アルコールに興味がない）、ホテルから信用を得、立派に自活してきた。卒業と同時に大阪大学大学院にストレートで入り、国際貿易の現状を具体的に学んで二年間で修士号を取り、三井物産に入り、現在ではブラジルに派遣され、第一線で活躍している。

1994年度における留学生数は13人であった。内訳は韓国、中国、台湾である。中国からの留学生の数が増加する傾向にある。留学生を今後とも受け入れていくためには、できるだけ奨学金を準備すること、そして適当な下宿をあっせんできるようにすることである。また、日本語教育を充実することも重要な課題であり、これは1995年以降漸次改善、充実を見、現在では留学生のための部屋（国際交流室）を設置し、契約講師としての日本語教育の専門家を置いて、常時留学生の日本語訓練とケアに当たっている。

15. 新発田市・聖籠町との関係

新発田は江戸時代、溝口氏の城下町として栄えた町である。明治に入って陸軍の歩兵連隊の駐屯地となり、それなりの繁栄を保持してきた。戦後には自衛隊の駐屯地を維持しつつ、製糸織物業、酒造業、金属工業、食品工業が発達してきたけれども、大型の企業はなく、商業全体としてみるとメイン・ストリートのシャッターがおりたままの店舗が徐々に増えるなど、凋落傾向をくいとめることができなかった。新発田の活性化をはかるための手段の一つとして誘致されたのが敬和学園大学であったが、はたして敬和学園大学は新発田市の活性化に貢献したといえるであろうか？ 一学年の定員200人、全学で800人の大学生では、人口8万人強の新発田市にとって、総人口の1パーセント以下の少人数にすぎない。学生たちが町の中を歩いている姿はめったに見かけず、存在感は比較的薄いようであった。そこで、大学の存在感を示すために、思い切って初年度には、8月の新発田祭の民謡流しに、教職員と学生有志で参加することにした。そうすれば町の人々が、敬和の学生さんも踊っている、と認識してくれるのではあるまいか。敬和学園大学では揃いのゆかたを作り、市の観光協会が派遣してくれる踊りの先生から「新発田音

頭」と「新発田甚句」の特訓を受けた。近市長が踊る以上は、学長も踊るべきである、ということで、学長夫妻は恐る恐る参加することにした。教職員（といっても、教員は北垣のみ）も学生も、ゆかたの帯をきちんと結ぶことすらできなかったのも、長澤雄介総務課長が帯結びを一手に引受けた。初めてのことであり、踊りはたしかに下手であったが、参加することに意義があった。あの日、敬和学園大学の存在に気付いた市民は少なくなかったであろう。

学生たちのうち新発田市内に下宿する学生も学生総数の半分以上が限界であろう。なぜなら敬和学園大学の学生の約半数は新潟市方面からの通学生だからである。言い換えれば、新発田市が誘致した大学でありながら、新潟市という50万都市の存在なしには、大学を維持できない、という事情がある。

近寅彦市長は北垣学長に色々な委員を委嘱してきた。煩雑を恐れずに列举すれば、新発田地域高等教育機関等推進対策協議会委員、地域経済活性化懇談会委員、新発田市都市計画審議会委員、産業会館及び上町パーキング跡地再開発計画検討委員、新発田市温泉利用検討委員、新発田市生涯学習振興公社理事、新発田市制施行50周年・溝口秀勝侯入封400年祭記念事業市民検討委員、市制施行50年・城下町400年記念事業実行委員、新発田地域広域事務組合広域行政圏審議会委員、新発田市特別職報酬等審議会委員。地域経済をいかにして活性化するか、温泉をどのように利用すべきか、市長や市議会議員の給料をどうするか、といった問題は、明らかに私の能力を超えた問題であった。しかし大学長という肩書きは「学識経験者」という範疇に最もよく当てはまるものらしかった。学長以外にも、後年には市職員の法的知識を増進するためのセミナー、あるいは新発田の女性学のためのセミナー等を、個別の教員が担当するようになった。

しかし新発田市と敬和学園大学の実質的な距離がぐんと縮んだのは、1995年8月に、長らく新発田市助役を務め、敬和学園大学設立についても市長の片腕となって尽力してきた藤倉庄平前助役を、仙沢計美初代事務局長の後に、二代目の事務局長に迎えた時期であった。この時期は本稿が取扱う期間（1991-1995年）を外れるので、このことを指摘するだけにとどめたい。

新発田市でも聖籠町でも、それぞれに国際交流のプログラムを持ち、折にふれて海外への研修旅行を実施していた。そういう研修旅行の一端として新

発田市では1992年7月16日から25日にかけて、海外の大学町めぐり研修のプログラムを組み、北垣学長を団長とし、近市長、数名の市会議員、商工会議所関係者、市内の有識者らが参加した。参加者の中には近市長のあとを次いで市長となった片山吉忠・新発田商工会議所会頭、その後敬和学園大学に新生として入学することになる佐藤浩雄・市会議員、医師会の重鎮でオレンジ会の初代会長だった富樫益郎医師、大学が発足するまで大学設置準備室長次長として尽力した相馬六氏らがいた。私は訪問先として敬和学園大学の姉妹大学であるノースウェスタン大学とオレンジ・シティ、ハーヴァード大学、スコットランドのセント・アンドルーズ大学を選び、案内役兼通訳を務めた。新発田市の代表がノースウェスタン大学とオレンジ・シティを訪れるのは1990年に次いでこれが二度目であったが、今回は市長、市会議員を含む大型訪問団であり、向こうの大学と市から大歓迎を受けた。「大学と市」との関係というテーマに基づいて新発田市の訪問者は次々に質問を発し、通訳を悩ませるほどであった。オレンジ・シティがノースウェスタン大学を市の誇りとして、重視していることは明らかであった。

次の訪問地ボストンではハーヴァード大学を表敬訪問し、北垣の旧知であるDaniel Aaron教授と、大学の存在するケンブリッジ市との渉外担当者であるHathaway Green女史が訪問団を Warren House のセミナー室に招いて対応した。エアロン教授が大学と市の関係について5分間紹介し、グリーン女史がハーヴァード大学とハーヴァードのあるケンブリッジ市との間に起る問題点を説明し、質疑に移った。近市長を皮切りに市会議員たちは競って質問し、大学のセミナーにふさわしい活発なやりとりとなった。グリーン女史によると、ハーヴァードの学生の三分の一はケンブリッジ市内で熱心にボランティア活動をしており、市民から感謝されているという。しかし市側はこれ以上ハーヴァード大学が大きくならないよう神経を尖らせており、ハーヴァード大学としては卒業生であるケネディー大統領の記念センターをケンブリッジ市内に作りたかったが、人々がそこに押し寄せることになるので遠慮して、それはボストンに譲ったという。活発なセミナーを終り、北垣が一行をハーヴァード・エンチン図書館（日本語、中国語、朝鮮語の膨大な文献を収蔵している）に案内すると、日本語関係図書主任の青木利行氏が説明してくれたが、青木氏は奇しくも新発田市の出身であった。オレンジ・シティとノースウェスタン大学の場合には調和・協力が基調だったが、ケンブリッジ市とハーヴァード大学の場合にはかなりの緊張も見られることがわかった。歴史の長さにも関係がある。

ついで大西洋を渡り、ロンドンからエディンバラへ飛び、チャーターしたバスでセント・アンドルーズを訪問した。ここでは北垣の旧友で、大学の化学上級講師を務めてきた David Calvert 博士夫妻の歓迎を受けた。セント・アンドルーズ大学は1411年の創立で、英国で3番目に古い大学であり、スコットランドでは最古の大学である。大学と市とはしっかりと融合している感じで、現在では特に問題はないようである。大学あつての市であり、市あつての大学である。訪問団は多くのことを学んだ。参加者中の数名は世界的に有名なゴルフ場でプレイした思い出を持って、全員が無事帰国した。

敬和学園大学が新発田市と聖籠町に奉仕するとすれば、その方法の一つは大学にふさわしい講師を迎えて、公開で学術文化講演会を開くことである。1991年4月16日の、渡辺正雄・東大名誉教授による開学記念講演「ニュートンのりんご」についてはすでに触れた。この年の秋10月24日には、北垣学長の友人である日本文学者ドナルド・キーン教授を新発田に招いた。その日の午後、大学の教室で学生有志を集めてフォーラムを持った。芥川、太宰、川端のように、何人かの日本のすぐれた作家が自殺したという話題になったとき、一人の学生が、「それではキーン先生はなぜ自殺しないのですか」と、とんでもない発言をした。それに対してキーンは「まだその必要はありませんし、それにぼくは非常にラッキーな人生を送ってきたと思うし、自分の人生に感謝の気持ちもあるからです」と答えた。その夜、新発田市民文化会館でキーンは「日本文学はなぜ面白いのか？」と題して講演した。聴衆の反応は上々で、受付のテーブルに積まれた何種類かの彼の著書は次々に売れ、彼はそこに座りこみ、長い時間をかけてサインし続けた。(キーンは2001年、聖籠町町民会館を会場とする敬和学園大学の創立十周年の記念講演会では、小和田恒博士とともに、もう一度記念講演をした。)

次は、市民を対象とする公開講座で、これはのちにはオープン・カレッジと呼ばれるようになった。最初の大学教員の人数は32人であったから、これを四組に分けて、四年間で一巡するよう計画を立てた。これは一つには、大学教員の「顔見世」の機会であった。つまり、敬和にどういう先生がいるのかを市民に知って頂く機会だったのである。一人ひとり、自分の得意とするトピックについて一回講義することから始めた。会場は主として新発田市公民館の講堂であったが、1993年10月からは、完成した生涯学習センターに会場を移した。初年度の開講式は10月4日(金)で、まず北垣学長が講義し

た。私は努めて公開講座に参加して司会役を務めたが、これはそれぞれの教員の得意とするトピック乃至守備範囲を知ることのできる機会になった。

初年度(1991年)には8人が講義した。この公開講座に登録した人数は80人、男性と女性の比率は6:4で、40代が最も多く、次いで60代、30代が続いた。新発田市から69人、聖籠町から7人、あとは豊浦町、紫雲寺町、加治川村、新潟市から各1である。各回の平均出席人数は55人であった。受講生は10人ずつ八つの組に編成され、当番をきめて、その日の講義のコメントを書いてもらった。1992年の公開講座には10人が1回ずつ、合計10回の講義を行った。ブロンデ助教授が「ハムレットの意味と死の意味」と題して講義したさいには、私が通訳を務めた。講義のトピックは前年度同様、文学、神学、文化人類学、国際問題、科学技術、確率論に亘り、敬和学園大学のリベラル・アーツ教育を反映するかたちとなった。登録者数86人で、毎回平均58人が出席した。なお、この講座は新潟県立生涯学習センター主催の「いきいき県民カレッジ」の一講座として、終了証を受けた受講者は15単位が認定された。

1993年度には初めて「共通テーマ」として「歴史・文学・コミュニケーション」を掲げ、10人の教員が登場した。ブラウン助教授は「コミュニケーションと国際化」と題して日本語で講義した。ゴールドステイン教授の「日本の短歌」は私が通訳した。登録者数は102人にふえ、平均74人が出席した。4年目(1994)に入ると、「現代の国際社会」という共通テーマをかかげ、齋藤祐介講師の司会のもとにフィリピンの政治経済に詳しい浅野幸穂教授、国際関係論や平和学を担当する塩屋保助教授、ベンチャー企業に詳しい西沢昭夫助教授のパネル・ディスカッションからスタートした。講義は7人が7つの講義を受け持ったが、登録者数は73人に減少し、平均の出席者数は51人となった。これは文学や歴史やキリスト教学がぬけて、社会科学方面に集中したためと推測される。しかし受講生のコメントは従来に見ないほど真剣なものとなっており、多くの要望を加味して爾後の講座を立案することが可能になった。

16. 文部省との関係

開学した年、入学定員200人の敬和学園大学が316人の新生を入学させたことで、文部省高等教育局企画課から学長は呼び出しをうけ、7月3日に事情の説明を求められた。初めての入学試験であり、どれほど定着するのかを

予想するためのデータがまったくなかったとはいえ、316人もの学生を入れたことは確かに問題であった。すでに担当教員はきまっており、四年間の時間割さえも提出した上での大学設置認可であったが、さてどう対応すべきか。文部省は定員を大きく上回る入学生となったことはやむをえないとして、教育の質の低下を招いてはならないから、教員を増員するなどして、教育条件を充実するように、との「行政指導」を与えた。特に英語については、新しく二人の非常勤講師を雇い、学長も担当するということで対応することにした。そこでさっそく二人の非常勤講師候補を、大学設置審議会の教員資格審査にかけることにした。その一人は千葉（結婚後、金山）愛子氏であった。

予想をはるかに上回る学生数であったため、敬和学園大学の食堂オレンジ・ホールは混雑をきわめた。この機会に文部省に相談したところ、混雑を緩和するために食堂を拡張することは差支えないということであった。私を含めて職員たちは、完成年度までそのような工事をするには一切できないものと思っていた。人事の場合と同じく、学生のためになることは（教育環境の質を落とさないためには）増築も認めよう、ということで、一旦スタートしてしまった大学に対する文部省の対応は案外柔軟であった。そこで1992年9月18日、オレンジ・ホールのアネックスの起工式を挙行了。工事は年内に完成し、これのおかげで学生たちはいくらかのゆとりをもって食事できるようになり、また学生生活に潤いを添えることが可能となった。12月のクリスマス行事として多数の学生が市内にキャロリングに出掛け、帰ってきてから行う大学のクリスマス・パーティには、このアネックスが会場となった。

1991年9月4日に新潟県の金子知事の発案による第一回「学長・知事懇談会」がホテル新潟で開かれ、県内の国立私立の大学長が出席した。国立の新潟大学、長岡技術科学大学、上越教育大学、私立の新潟薬科大学、日本大学新潟歯学部、新潟産業大学、敬和学園大学の七大学であった。新聞記者席も用意されていた。知事が県としての大学に関する方針、希望等を述べ、各学長が自分の大学の状況を簡単に報告した。新潟産業大学の学長が県外からいかに多くの学生を集めているかについて、誇らしげに述べたので、私は憤りを感じて、敬和学園大学では逆に県内の受験生には激励する意味で若干点数をプラスして入学させたことにふれた。大学設置のさいに、新潟県から6億円の助成があったこと、そして新潟県の大学進学率が全国最下位に近いことが頭にあったからである。この発言を毎日新聞が取り上げて9月5日に報道し

たので、9月6日には新潟日報、朝日、読売等の各紙も追随した。こうして私の発言は一つの「事件」となった。

これに対し、「さすが敬和学園大学だ、よくやった」とほめる人も複数いた。新聞沙汰となったために新潟田市議会で、近市長に北垣発言を知っていたか、「大学誘致に物心両面で大きな協力をしてきた市として、しかるべき対応、あるいは指導をすべきではないか」と質問をする議員も現われた。市長は、「学長発言は新聞で知った」と述べ、「県内から一人でも多くの入学者を、との願いにこたえ、大学は推薦入学を定員の半数の百人とし、このうち地域の高校に四十人の枠を設定してくれ、大いに感謝している」と、大学の姿勢に謝意も表した。敬和の措置を特に支持、激励するような意見は新聞に現れなかった。文部省から事情を説明するよう求められたので、私は文部省に赴き、敬和学園大学が誘致された経緯及び全国最下位に近い新潟県の進学率にかんがみ、ボーダーラインに近い新潟県の受験生5人を激励の意味で若干の加点をして合格させたこと、加点しても水準に達しないものは不合格としたことを説明した。文部省としては、それは別に法律違反ではないが、募集要項等に明記していない以上は公正さを欠いた措置であった、との見解を示した。その後の推移からみると、この問題に関する限り、文部省の窓口は敬和学園大学がこれ以上新聞等の攻撃にさらされないよう、防衛しようとする態度を示した。この事件は時間とともに人々の記憶から去っていった。当時は全国の受験生がピークに達する時期であったから、これが問題となったのである。その後少子化が進み、10年後には入学定員を満たすことさえ不可能になる時期がくるとは、想像もできない時代であった。

17. 敬和学園大学の発展

開学して間もない頃、一人の女子学生から「この大学では英語の教員免許は取れますか？」という質問を受けた。何はともあれ大学をスタートさせることを後生大事に考えてきた私は、教職課程のことまで考える余裕がなかった。そこで「敬和学園大学では残念ながら今のところ教職課程を設置していないので、教員免許を取る事はできません」と答えたところ、彼女は「それじゃ私退学して、取れる大学に行きます」といって目に大粒の涙を浮かべた。このような学生を失望させないためにも、教職課程はぜひとも設置しなければならない、と私は決意した。そこで教職課程の認可を受けるためにはどうすればよいかということで、にわか勉強を始め、孫野義夫教授の紹介で、新潟大学教育学部の齋藤勉教授に助言を求めに行った。齋藤先生は敬和の英語

英米文学科の科目表を点検して、少なくとも教育原理の担当者と、教育心理学の担当者の二人を採用する必要があることを指摘された。また中学校教諭一種免許状、高等学校教諭一種免許状を得させるための、教科に関する科目表と、教職に関する科目表も作って下さった。齋藤教授にはのちほど敬和学園大学の教職課程の一科目を非常勤講師としてご担当願うことになったが、このように教職課程の設置申請に当たって適切なガイダンスを頂いたことは忘れることができない。

教育心理学の担当者は心理学者である同志社の松山総長の推薦により、益谷眞氏を得たが、教育原理担当者は簡単でなかった。さすがの齋藤教授にも候補がなく、私は友人の教育学者で神戸女学院の院長を務め、松山東雲女子大学の初代学長に内定していた岡本道雄氏に相談した。岡本氏にも候補がなかった。教育原理担当者を確保しないことには、教職課程を設置することはできない。途方に暮れていた私に突然救いの手をさしのべて下さったのは京都大学教育学部長の岡田渥美教授だった。すっかり忘れていたが、私は若い頃岡田氏を同志社女子大学に推薦したことがあったという。岡田氏は国際基督教大学の集中講義で教えた人の中に、柴沼晶子という人がいること、彼女にはフェリス女学院大学で教えていた経験もあるので、至急当たってみては、ということだった。私は飛び立つ思いで、柴沼女史の住んでいる鎌倉に出掛け、家を見つけたが不在だった。お願いのむきを置手紙して引揚げた。二三日して、幸いにもよい返事があり、私は愁眉を開くことができた。柴沼先生は体が丈夫でなく、受験生のご子息があり、遠路新発田まで通うことは不安であったが、ご主人が引き受けるよう奨めてくださった、とあとでご本人から聞いた。こうして必要な二人を確保し、二人は文部省の資格審査を問題なく通過し、カリキュラムもよろしいということになり、敬和学園大学の教職課程は1993年3月30日付で認可が下りた。こうして教職課程は1993年4月からスタートした。(私の前で大粒の涙を浮かべた女子学生はさいわい退学しなかったが、その後気が変わり、教職課程がスタートしたのに、それを取ることもなしに卒業していった。)

図書館には教職課程に必要な書物約2,600冊を新たに購入した。国際文化学科の学生で、教職課程を取りたい学生十数名は、面接を受けた上で、英語英米文学科に転科した。柴沼晶子教授は始まったばかりの教職課程を細心に統轄し、英語教員を志望する学生を「教職課程事前研修」として毎年国立妙高少年自然の家で合宿させるなどして、教師になるための心構えの指導をも

怠らなかった。そのうちに一人、二人と新潟県の教員試験に合格する者が現われ、公立の中学、高校に就職していった。県下には上越教育大学と新潟大学教育学部という、二つの有力な教員養成機関があるのに、私立である敬和学園大学からも少数ながら優れた教員が食い込んでいくことになり、これが世間の注目を集め、それがまた敬和学園大学の特色の一部となって今日に及んでいる。その後柴沼教授は聖籠中学と連絡を取り、教職課程の学生をアシスタントとして送り込むインターンの制度も作った。学生がそのような実習の場を身近に与えられたことを喜んだことはいうまでもない。益谷講師は若者らしくきびきびと教え、教職課程の中核的存在へと成長していった。

敬和学園大学のガバナンスについては、毎月一度教授会を開き、助教授・専任講師にも教授会のフル・メンバーとして参加を求め、人文学部長である北垣学長が議長を務めることにした。学長と宗教主任が交互に開会祈祷をささげて、会議を開くことが慣習になった。菊地教務課長が忠実に議事録を作って全員に配布し、前回議事録を確認してからその日の審議に移った。一般教育の主任としてギリシア史の安藤弘教授、英語英米文学科主任として19、20世紀英文学の伊藤豊治教授、国際文化学科主任として江戸時代思想史の田原嗣郎教授を配し、それぞれの部門は学科主任を中心として集まりを持ち、それぞれの部門固有の問題を処理してきた。また教授会に先立ち、議案をきめたり、特別な問題を理解しておくために、学長の諮問機関として「大学運営委員会」を置いた。大学運営委員会は学長を議長とし、一般教育主任、英語英米文学科主任、国際文化学科主任、宗教主任でもって構成した。1992年10月からは学生主任が加わったし、完成年度後には教務部長、図書館長も加わった。（私が途方に暮れたのは、稀にではあったが、伊藤教授と田原教授という、どちらも東京大学の出身で、国立大学に長らく奉職してきた大物教授が正面から衝突するときであった。）私は学長として理事会に出席していたが、幸いにして、理事会と教授会との板ばさみで苦しんだことは一度もなかった。後宮理事長からは常に暖かい支援を頂いてきた。

1992年5月に菅野浩教授を委員長とする就職委員会を発足させた。就職相談室を設け、そこに二人の職員を配置し、意欲的に学生の就職ガイダンスに当たった。菅野教授は親身になって就職の世話をする、模範的な就職委員長だった。新潟のホテルに企業を招いて敬和学園大学を宣伝し、卒業する学生の就職口の開拓も怠らなかった。第一期生は237人が卒業したが、家業を継ぐ予定の者を除き、175人が就職した。新潟、新発田とその周辺での就職が

多かったが、後には首都圏、海外の企業に就職する者も出てきた。新発田市役所や聖籠町役場も進んで卒業生を採用したし、他大学の大学院に進学する者も徐々にふえている。私が嬉しく思うことは、学生時代のボランティア活動が影響したのか、福祉関係の仕事に就く人が少なからずいることである。社会福祉士の資格を取った卒業生を私は少なくとも二人知っている。或る卒業生は福祉関係の仕事についたが、それにあきたらず、運輸会社に転じ、みずからトラックの運転をして東日本を駆け巡っている。彼は時折国道7号線を通るのだが、敬和学園大学の側を通るときには助手席を振り返り、「ごらん、あれが俺の勉強した大学なんだ」と誇りを持って指さすのだという。まだ書き足りないことが山ほどあるが、どこかで終止符を打たなくてはならない。すべての敬和学園大学卒業生が地の塩、世の光となることを心から願って、この貧しい記述を終らせていただく。